

有難い人生

柴田由紀子

大晦日が来ると主人は還暦を迎えます。生後数ヶ月の時に腸重積になり、義母は真っ青な我が子を抱きながら「この子を諦めなくてはいけないのかもしれない」と思ったそうです。

そして五十年後、彼は再び旅先の山奥で心筋梗塞になり救急車で高速に乗り一時間、血圧は220/190 数字を見た時、私は「ダメかもしれない」と思いました。

病院に着くと三本の冠動脈のうちの二本は詰まり、かろうじて、残りの一本がちよろちよろと流れており、もう少し遅ければ助からなかったと先生のお言葉。

ステント三本、退院後に再び二本のステントを入れ彼は薬に助けられながら今も普通に元気に暮らしています

六十年の人生で母親と妻に二度も諦められた彼は

『もしかしたら生きていることが奇跡なのかもしれない』と知り、この十年やり残していることはないか？会いたい人はいないか？

そんな人生の答え合わせをしながら有難い人生を過ごしています。

今、思うこと

高橋はる子



自分にプラスになることも幾つかありました。使ってなかったミシンを出し、マスク作りをしたり、草むしりに熱中の日々、何とかなんと過ごしていました。そして、イベント、教室などが中止となりましたが「オンライン配信」「オンラインレッスン」「クラウドファンディング」など好奇心で参加をしました。

今思うとこの上ない経験をすることが出来ました。若者は色々な事を考えると、感心と刺激も受けました。

この頃になって少し落ち着いたと云うもののまだまだ苦しみの中に多くの方が見えると思います。又このような未曾有な出来事が起きた時よく考えて対処、行動が出来る自分になっていて、もっと、もっと笑って過ごせる時が来ますように願う今日この頃です。

今、思うこと

神尾弘美

近所の庭にある2本のキンモクセイが2度咲きました。

一度目は、いつも通り、10月初めに開花して、甘い香りが漂っていました。ただ今年は、パッと咲き、パッと散ってしまい『ちょっと残念だね』と家の方と話していました。

そのキンモクセイが、11月に入り、2度目の花を咲かせました。キンモクセイの2度咲きです。

キンモクセイの開花時期は気温の影響を受け、気候などの条件で2度咲く事があるようです。

近年の高温化、温暖化の影響あるのかなと、気にかけながら、2度目咲きのキンモクセイを見つめました。

甘い香りは、変わらず漂っています。



2018年11月9日PET-CTと組織診の検査で、ステージⅣの質の悪い進行癌と診断。法人の事業承継を済ませ、娘である社長のサポートをしていこうと思っていた矢先だった。

7年前から特発性間質性肺炎を罹患して在宅酸素を使用して仕事をしながら療養生活を送っていた。酸素量は増えて現在では安静時3L、労作時は5L使用している。

手術の選択はしなかった。自分でもこれまでの看護経験で解っていたが、乳癌の手術は出来たとしても間質性肺炎の悪化で術後の人工呼吸器が外せなくなる、寝たきり状態になるかもしれないと主治医から説明があったからである。

癌は内面も外面も広がりを見せ、両腕にリンパ浮腫が出てきているが、現在でも現役の訪問看護師として現場に出向いている。

在宅療養は「健康管理と日常生活の立て直し」が基本と考える。利用者様は、多種多様な疾患を抱えているが、聞きたいことがあっても誰に聞いたらいいのか、どのように聞いたらいいのかかわからないという声が多数寄せられてきた。

利用者様が100人なら100通りの在宅療養のスタイルがある。私もその中の事例として存在している。抗癌剤、痛み止めの麻薬とそれに準ずる薬剤、在宅酸素などに対する考え方はとても重要なポイントで、それに伴うケアとして排泄便のコントロール、口腔ケア、入浴や洗髪などの清潔援助のやり方を個別に考えていくことがとても大切である。

「なったものはしょうがない」を合言葉に現在の自分の疾患である間質性肺炎、乳癌（左右）の末期、心不全の状態を周囲が驚くぐらい冷静に客観的に受け入れている。

人生70年を目前に看護師として50年の経験と患者としての体験を踏まえ、在宅療養で悩んでいる方のお役に立てることができたら幸いである。

（訪問看護ステーションまつざき 水曜日 金曜日 13:30～16:30 090-2132-2261）

♥松崎さんは在宅療養で悩んでいる方のお役に立ちたいと会員のみなさんにお声をかけてくださいました。

娘さんの中村かおり看護師さん（リリーハート社長）たちも協力してくださるそうです。

会員のみならず、お知り合いでお困りの方にも相談に応じてくださいます。

面会の制限があるコロナ禍の今、自宅という方法も選択肢の一つだと思います。（橋詰）

最近思うこと

伊藤彩子

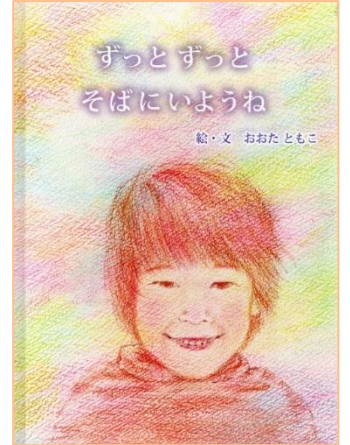


近くの公園の銀杏の木がきれいな黄色に色づいてきました。でも昨秋は紅葉を楽しむ余裕がなかなかありませんでした。と言うのも、近所に住む舅が急病で入院、姑にも病気が見つかり、実家の母も入院手術と、80代になっても元気な親達に大きな体調の変化が続けてあったからです。幸い、今では不自由な体に折り合いをつけながら、自宅で新しい生活を送ってます。

私は最初は戸惑い、とても不安になりました。でも、段々と親達の姿は私の未来の姿で、三者三様に老いるということを教えてくれていると思うようになりました。そうすると、今度は私が息子達にどんな姿を見せたいだろうか？と考えるようになりました。子どもが小さい時は話を聴こうと思っても、つつい心配になって自分の方がたくさん話してしまい反省することも度々ありました。昨年春に社会人になった息子達ですが、話を聴く頼りになる母親でありたいと思うとともに、出逢いを大切にして、私らしく生きる姿を見せたいと思います。

「ずっとずっとそばにしようね」絵本原画展を終えて思うこと 太田智子
一生に一度、もう二度とない与えられたチャンスを終えて実のところホッとしています。

原画展で順番に並べ飾られた絵を眺め、無邪気に笑っている場面の泰葉（ニックネーム・あんの）に話しかけていました。「母さんは絵本を作る決心するまですごく大変だっただよ。なんであんのがここにいないのか、母さんが代わって死んであげられなかったのか……。毎日同じような地獄の繰り返し。毎日何をしていたのか何も思い出せない。どうやって生活していたのか記憶に全くない。



でもね、お兄ちゃんはいつも面白い事言ってくれて笑わせてくれていたし、はるくん（下のお兄ちゃん）は小学校6年卒業するまで寝る時毎日手をつないでくれてたよ。中学になったら一人で寝たいから自分の代わりにとたったひとつだけ持ってた大切なモグラのぬいぐるみをくれたんだよ。優しいでしょ。

でもね、母さんは外に出ることがとっても怖かったんだよ。あんのが死んじゃったのに“そんなこと”っていう人もいたし、あんのが死んじゃって一年経った頃“もういいよね”って言った人もいた。あんのが死んじゃって3～4年経った頃地域の学校役員を決める時も“やれないなら一人一人にやれない理由を説明して”（子供が死んだからって理由にならない）ということ言ってきた人もいたよ。母さん人間が大嫌いになってしまったよ。ふつうだったらこれで終わりだね。もう生きたくないもん。疲れるし、辛いし……。誰もわかってくれないし、わかる人もいないしね。なんで病気になってしまったのかね。あんのは病気になってしまったけど決して諦めることなく“退院してお家に帰る！”“学校へ行く！”“給食食べたい！”“勉強したい！”“みんなに会いたい！”と目標に向かってどんな治療にも耐えたね。よく生き抜いたよね！強い！。

なんかそんなこと思い出したら母さんも負けられんと思ったよ。

あんのがこの世にいたこと、母さんの想いを何かの形でのこしてやる！って決心したよ。大好きな絵で表現するね。

まずは絵がちゃんと描けないと伝わらないから絵画教室へかよいだしたよ。技術は勿論のことだけど先生は安らぎの場所を作ってくれたよ。仲間もいつも温かく見守ってくれて心強く感じたよ。あんののアルバムを開くのは辛いし悲しいしとても勇気がいったし、封印を解くのが怖かったけどこの人達がいるなら大丈夫とアルバムを開けたよ。写真見ているだけでお母さんは辛くて涙が止まらな



くて絵を暫く描けない時もあったけどそんな時はあんののがんばりを思い出してお母さんも闘ったよ！

あんのが死んじゃって7～8年経った頃かな、お兄ちゃんが「もう下はないよ！」という言葉をかけてくれたよ。その時“もう上しかないんだ！”って素直に受け入れられたよ。絵本の後半で描いた夕やけの彩雲や、雲の上の絵からは光が差

している気がしたよ。いや、確かに絵画展の絵は光を放っていたよ。あんのはきっと笑顔で神様の元にいるって自分の絵を見て改めて感じたよ。」

絵本完成まで4年。30枚近く。一步踏み出した先には心強い人達が待っていました。そしてそれから絵画展に至るまでも、新聞読者さんに想いが伝わる素晴らしい文章を書いてくださった新聞記者さん。彼は取材の時あんのの写真に手を合わせて涙ぐんでいました。心が温かいのですね。

又、初めての個展で困っている私をお昼から真っ暗になってしまうまで展示を手伝ってくださった方々、私の絵本に対する気持ちをお客様に最大限に伝えるように演出を考えてくださった先生、そしていつもどこでも力になってくれた友達、多くの方々の力が一つになって私を支えてくれました。

感謝の気持ちでいっぱいです。

娘と同じ病気でお子さんを亡くされてお母さん、様々な理由で私と同じ辛い思いをされたお母さん方々、親、親戚のお子さん、知り合いのお子さんを亡くされた方々、辛い経験はなくても新聞記事を見て下さった方々、その他多くの方々・・・。

私はこの絵画展で“大切なことや、大切な人を考えてもらうきっかけになれば“と思っていました。それがお越しくださった方々に伝わったでしょうか・・・。それはみなさんが流した涙でわかりました。大きな大きな犠牲でしたが、たくさんの収穫を得ることができました。そして娘と再会するまでの残された人生を笑顔で大切に生きていこうと思いました。

絵画展を観て思ったこと

◆ 全く事情を存じ上げず、頂いた可愛い絵を見たさに展示会にお伺いしました。太田さんの愛情溢れた泰葉ちゃんの生涯を拝見し、感謝のひとつきをありがとうございました。太田さんのお子様に対する愛情の深さ、苦しみ、悲しみに溢れた絵の数々に子供のいない私には頭が下がる感動のひとつきでした。亡くなった母も私に対して同じように愛してくれていたと改めて感謝しました。

(山西裕子)

◆ 一枚一枚丁寧に仕上げられてとても素敵な作品ばかりでした。優しさと愛の詰まった絵本“ずっとずっとそばにしようね” 温かい気持ちになりました。良い時間をありがとうございました。次の作品を期待しています。

(高橋はる子)

◆ 大切な人を思い浮かべながらご覧くださいとの文字に胸がいっぱいになり最初から涙が溢れました。明るい色彩から闇の中にいた時の色から優しい色彩が変わっていき、心の葛藤が手に取るほどわかりました。絵本は売り切れてしまい手元に置けないのが残念でした。太田さんと少しお話ができ、とても優しい話し方をされる方で、また手縫いの会でお会いできたらと思いました

(柴田由紀子)

♥増刷される予定ですが日時は未定 本屋「小さいうち」 「手縫いの会」で取り扱いします。

“手縫い”の報告

愛知病院・市民病院・国際病院・施設へ依頼された品を作り届ける
第2月曜日 10:00~12:00 場所 カトリック岡崎教会



9月末まで、コロナの緊急事態宣言が解除され、以前の活気を取り戻しつつあり、どこに行っても人の多さ、車の多さを感じます。

コロナになってから、人と会う事が難しいということを経験し、手縫いの会の月1回の集まりが、以前にも増して大切に感じられるようになりました。

その一方で、各家庭であるミシン縫いの作業は、現在、枕カバー、尿袋カバー、クッションカバー作りを行っています。寄付して頂いた布で工夫しながら作っています。

清拭布にする布（着古した綿の肌着・Tシャツ・シーツ・浴衣など）のご寄付、ありがとうございました。毎回使いますので、これからも宜しくお願い致します。（勝川俊子）

緩和ケア病棟ボランティアの報告

岡崎市民病院緩和ケア病棟
ティーサービス・アロママッサージ・演奏



お声がかかる日を待っています。

緊急事態宣言が解除され10月から「つどい」を再開しています。

★ここで話されたことは他の場所で話さない。

★批判しない。

★指導的なことは言わない。

この約束のもと「つどい」はあります。

人に会って、顔を見て話をする、人の話に耳を傾ける。そんな時をいっしょに過ごしてみませんか。どうぞご参加ください。

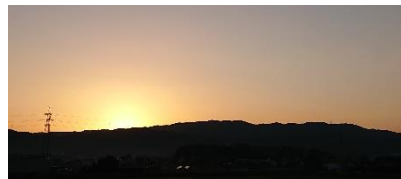
※マスク、消毒、換気など感染対策を行っています。

※緊急事態宣言が発令された場合は、中止させていただきます。(神尾弘美)

テレビの金スマを久しぶりに観た。タイトルが「社交ダンス新メンバー決定」という見出しだったからだ。誰だろうと思って観たら「浅田舞」だった。彼女がフィギアスケート引退後テレビで、いつも真央さんのことを聞かれているのを知っていた。そして「自分の存在って何だろう」と悩んでいることも知っていた。金スマで目が輝いているのをみて安心した。自分にも同じような経験がある。中学校に入った頃、成績優秀な姉のことをいつも聞かれていた。私たちの母は病弱で入退院を繰り返しそのたびに私たちは母方の実家に預けられた。小さかった私はどこに行っても邪魔者だった。母の三十三回忌を終え二人で叔父のところに行った。叔父は姉がお気に入り。ここでも私は疎外だった。二人の会話を聞きながら「大きな流れに身を任せてみよ、見えないものが見えて来るぞ」と言った叔父の一言が何故が私の腹にずしんと落ちた。

去年の今頃従妹が電話をしてきた。叔父が病院で「何もすることがない、後は看取りだけ」と言われ連れて帰って自分が看ている。看護師の仕事は退職したとのこと。プロのやることだと周りは褒めてくれるが自分には自信がない。私がかつてホスピスの関係をしていたことを思い出して電話をした、と言っていた。看護師と言っても緊急の場所にいたので看取りについてはまるで初めてのこと。電話で話を聞いて翌日すぐに手元にあった本を送った。玉置妙憂さんの『ただ、そばにいるということ』読み終えたばかりで付箋だらけだったがそのまま送った。彼女からは今年の1月に無事見送ったと晴れやかな声で連絡が来た。

娘が、2年前の母の日に私の誕生日から読み取った「ホロスコープ」をプレゼントしてくれた。説明を聞いてとても興味深かったが理解できず1年前に12時間の講座を受けた。衝撃的だった。出生時の星を教えてもらいながら自分の人生を振り返ると今までのコンプレックスは吹っ飛んでしまった。大きな流れに身を任せるしかない。蝶が蛹に変容していくように、過ぎ去った過去には戻れない。行くしかない、これからの道へ。 —また日は昇る—



(難波清子)

【あとがき】

病気、理不尽な死、生い立ちなどそれぞれを我が胸に納めながら今を生きている私たち、それでも出会いの中から、生きていく力強い何かが生まれてくると気づかせていただきました。(竹田)